

ハノイのペンシルハウスの生活 (特集 世界の住まい・今)

著者	石塚 二葉
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	191
ページ	17-18
発行年	2011-08
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00004175

ハノイのペンシルハウスの生活

石塚 二葉

中央計画経済体制下のベトナムでは、都市部の住宅供給は国家によって独占されてきたが、一九八六年のドイモイ政策導入以降、市場経済化と急速な経済成長にともない、人々の居住環境にも大きな変化が生じている。

一九九〇年代のハノイでは、可処分所得の向上を背景に、個人による住宅建設が至る所で活発に展開された。さらに二〇〇〇年代に入ると、市周縁の、従来農地や湿地であった地域を開発して、主として高所得層向けの大規模集合住宅を建設するプロジェクトが、次々と着工された。他方、都市人口の増加にともなう低所得者向けの住宅の不足は深刻である。国の方針のもとで、ハノイ市も低所得者向け住宅の建設を急いでいるが、土地価格の高騰等の理由によりその実現は遅れている。

このように、ハノイだけを見ても、人々の居住環境は年々多様化が進んでいる。本稿では、まずベトナム全体およびその都市部における居住水準の概要をセンサスのデータから示し、次いでハノイの住宅のひとつの典型であるペンシルハウスについて、筆者の滞在経験を元に紹介してみたい。

二〇〇九年人口住宅センサスによれば、二〇〇九年四月一日時点において、住宅に居住する全世帯のうち、四七%が恒久的な家屋に居住している。これは一九九九年センサス当時と比べて、四倍近く増えている。家屋の構造という面から見て、住宅の質が全体として向上していることがうかがえる。二〇〇九年の一人当たり住宅面積は一六・七平方メートルであった。これを二〇二〇年には一人当たり

二五平方メートル、二〇三〇年には三〇平方メートルにまで増やすことが現在の住宅政策の目標となっている。持家比率は全国的には九三%に達しているが、都市部ではやや低く、八六%である。

また、二〇〇九年では全国で九六%（都市部ではほぼ一〇〇%）の世帯が照明に電気を用いている。これは一九九九年の七八%から大きく改善しており、農村部における電化の進展を示している。飲料水についてみると、二〇〇九年では全世帯の八七%が衛生的な水を使っているとされる。しかし、これは井戸水や雨水を含む数値であり、上水道の利用は全国で二六%、都市部でも六四%にとどまっている。また、衛生的なトイレを使用している世帯は全国で五四%（都市部では八八%）とされ、トイレのない世帯も全国で八%

（都市部では二%）存在する。主要な電化製品等の普及状況は次表のとおりである。

表1 家電製品等の世帯普及率

	普及率（2009年）	
	全国	都市部
テレビ	86.9%	91.3%
固定電話	45.7%	61.7%
コンピューター	13.5%	31.8%
洗濯機	14.9%	36.1%
冷蔵庫	31.6%	57.4%
エアコン	5.9%	16.2%
バイク	72.3%	83.2%

（出所）2009年人口住宅センサス。

これらの電化製品等についてもこの一〇年間で着実に普及が進んでいるが、日本で一九五〇年代に三種の神器といわれたテレビ、洗濯機、冷蔵庫を見ても、テレビ以外は（特に農村部では）まだ普及率は高くないのが現状である。

筆者は二〇〇六年七月から二月までの約五カ月間、ハノイのある新興住宅地のペンシルハウスに

住んでいた。二〇〇一年出版のある文献によれば、五〇〇六〇平方メートルの土地に建つ、鉄の門と小さな庭付きの二階か三階建ての一戸建てを持つことはハノイ人の夢であるという。筆者が住んでいたのは概ねそのような家だった。

敷地面積は四五平方メートル、五階建てのその家には、前面にバイクが二、三台とめられる程度の庭があり、鉄の門がついていた。両隣と後ろはそれぞれ隣人の家と密着している。家主は公務員で、この一帯はその所属先の機関の職員の居住地区となっていた。当人も職場からこの土地の割り当てを受け、長年の借家暮らしを卒業して、二〇〇三年に念願のマイホームを建てたところであった。

一階は車とバイクの駐車スペースおよび住み込みのお手伝いさんの寝起きする場所となっていた。二階が食堂と居間兼応接間、三階と四階が寝室で、五階は半分が屋上の物干し場で、残りの半分に洗濯機と仏壇などが置かれている。一階から四階の各階にトイレとシャワーがつき、三、四階にはバスタブもある。エアコンは二階から四階まで各階に一台ずつ（部屋は各階二部屋ずつ）。

テレビは食堂、応接間、主寝室にそれぞれ置かれていた。高い天井にはシーリングファンが下がり、足下の床は、ベトナムでは珍しく、一階を除き、木のフローリングが施されていた。

建物は一見まずまず近代的だが、住んでみると施工の稚拙さがいやでも目についた。設備の不具合も絶えなかった。水は地下の貯水タンクから自動的に屋上のタンクにくみ上げられるはずなのだが、何かの系統に不具合があつて、屋上のタンクが空になつてもポンプが作動しない。水が止まると、お手伝いさんを呼んで、ポンプを起動してもらわなければならない。また、一階の前面はガラス張り、夜は電動でシャッターを下ろすのだが、このシャッターが動かなくなつたときには、家主は二階の窓から梯子をかけて外に出て、バイクを出せないののでバイクタクシーで出勤していた。

この家に住み始めたのは夏の盛りで、当初最も悩まされたのは蚊の多さだった。筆者はそれ以前にも三年間、ハノイの中心部に住んでいたことがあるが、そのときはほとんど蚊に悩まされることはなかった。しかし、この家は、湿地

を開発した新興住宅地に位置するためか、ハノイに住むベトナム人も「ここは蚊が多い」と認めるほどであった。家主と交渉して寝室には網戸をつけてもらったが、全ての部屋に網戸をつけるわけにもいかない。よほど寒い時期を除き、この家では日中ほぼ全ての窓やドアを開放しており、階段は吹き抜けである。このような家では、その一部だけを閉じた空間にしようとしても無理があり、無益でもある。高温多湿のハノイでは、通気性のよさが住居にとって何よりも大事なのだということを実感した。やむなく、農村に行く機会に備えて念のために日本から持参した防虫服を家のなかで着込んでしばらく過ごしていた。

ベトナム人の住居が開放的なのは、自然環境に対してばかりではない。この家では、家主の家族、親族から友人、同僚、近所の人など、実に様々な人が頻繁に出入りする。夕食後、入浴後の時間帯でも電話一本で、あるいは予告なしに来客がある。基本的には応接間で応対するが、親しい関係にある人であれば寝室にでも遠慮なく出入りするので、同居している筆者としてもおちおちくつろいでいら

れない。ベトナム人は、親子、兄弟、親戚同士が、特別な用事がなくても毎日のように互いに訪問する、というのは本当であった。もっとも、出入りするのには家族、親戚等に限らない。ある時など、以前この家で働いていた元お手伝いさんがふらつと現れ、一晩か二晩泊まっていた。家主に訳をきいてもよく分からないという。それでも何となく滞在を許しているのが不思議な気がした。

大学時代に「上京」して、今やハノイ人の夢である一戸建てに住む家主は、平均的なベトナム人と比べれば、先進的な生活水準を謳歌しているといえよう。しかし、その生活様式は、やはりベトナム人のそれに他ならないと筆者には思われた。同時に、気密性の高い、プライベートな空間である日本の我が家が少々懐かしくなった。

(いしづか ふたば／アジア経済研究所 法・制度研究グループ)

《参考文献》

Schenk, Hans, and Trinh Duy Luan eds. [2001] *Housing and Land in Hanoi, Hanoi: Cultural Publishing House.*